

# 球とそのベクトル場

名古屋大学大学院多元数理科学研究科

ヘッセルホルト ラース

NHK文化センター

2009.03.28

## ユークリッド空間

$$\mathbb{R}^n = \{(x_1, x_2, \dots, x_n) \mid x_1, x_2, \dots, x_n \in \mathbb{R}\}$$

$$x = (x_1, \dots, x_n) : \text{ベクトル}$$

$$x + y = (x_1 + y_1, \dots, x_n + y_n) : \text{ベクトル和}$$

$$tx = (tx_1, \dots, tx_n) : \text{スカラー積}$$

ベクトル和  $\sim$  平行移動

スカラー積  $\sim$  拡大

## ユークリッド空間の幾何

$\langle x, y \rangle = x_1y_1 + \cdots + x_ny_n$  : 内積

$\|x\| = \sqrt{\langle x, x \rangle}$  : ノルム  $\sim$  長さ

補題  $-\|x\|\|y\| \leq \langle x, y \rangle \leq \|x\|\|y\|$

証明  $\langle tx + y, tx + y \rangle \geq 0$  よって、

$$\|x\|^2 t^2 + 2\langle x, y \rangle t + \|y\|^2 \geq 0$$

事実 「 $at^2 + bt + c \geq 0 \Rightarrow b^2 - 4ac \leq 0$ 」 より、

$$(2\langle x, y \rangle)^2 - 4\|x\|^2\|y\|^2 \leq 0 \quad \text{よって、}$$

$$\langle x, y \rangle^2 \leq \|x\|^2\|y\|^2$$

これで、補題が成り立つ。

## 直交しているベクトル

$0 = (0, \dots, 0)$  : ゼロベクトル

$$x = 0 \Leftrightarrow \|x\| = 0$$

定義 ゼロでないベクトル  $x, y$  のなす角  $\theta$  は、次の等式で定義される。

$$\cos \theta = \frac{\langle x, y \rangle}{\|x\| \|y\|} \quad (0 \leq \theta \leq \pi)$$

定義 次の等式を満たすベクトル  $x, y$  は、直交しているベクトルと呼ばれる。

$$\langle x, y \rangle = 0$$

特に、ゼロでないベクトル  $x, y$  に対して、

$$\langle x, y \rangle = 0 \quad \Leftrightarrow \quad \theta = \frac{\pi}{2}$$

$$\text{直交している} \quad \Leftrightarrow \quad \text{直角}$$

## 球 $S^{n-1}$ とその接ベクトル場

$S^{n-1} = \{x \in \mathbb{R}^n \mid \|x\| = 1\}$  : 単位球

$T_x S^{n-1} = \{y \in \mathbb{R}^n \mid \langle x, y \rangle = 0\}$  : 接空間

定義 球  $S^{n-1}$  上の接ベクトル場とは、以下の性質 (1)–(2) を満たす写像

$$\mathfrak{X}: S^{n-1} \rightarrow \mathbb{R}^n$$

のことである。

$$(1) (\forall x \in S^{n-1}) : \langle x, \mathfrak{X}(x) \rangle = 0$$

$$(2) (\forall \epsilon > 0)(\exists \delta > 0)(\forall x, x' \in S^{n-1}) :$$

$$\|x - x'\| < \delta \Rightarrow \|\mathfrak{X}(x) - \mathfrak{X}(x')\| < \epsilon$$

例  $n = 2m$  が偶数のとき、次の式は、球  $S^{n-1}$  上の接ベクトル場を定義する。

$$\mathfrak{X}(x) = (-x_2, x_1, \dots, -x_{2m}, x_{2m-1}).$$

## 単位接ベクトル場

以上の例で定義された接ベクトル場について、各点  $x \in S^{n-1}$  に対して、

$$\|\mathfrak{X}(x)\| = 1.$$

つまり、 $\mathfrak{X}$  は単位接ベクトル場である。

補題 次の性質 (1)–(2) は同値である。

(1) 球  $S^{n-1}$  上にどこでもゼロでない接ベクトル場が存在する。

(2) 球  $S^{n-1}$  上に単位接ベクトル場が存在する。

証明 どこでもゼロでない接ベクトル場  $\mathfrak{X}$  において、次のように定義された接ベクトル場  $\hat{\mathfrak{X}}$  は、単位接ベクトル場である。

$$\hat{\mathfrak{X}}(x) = \frac{\mathfrak{X}(x)}{\|\mathfrak{X}(x)\|}$$

定理 (Poincaré–Brouwer) もし  $n$  が奇数なら、  
どんな球  $S^{n-1}$  上の接ベクトル場  $\mathfrak{X}$  に対しても、必ず  $\mathfrak{X}(x) = 0$  となる点  $x$  が存在する。

証明補題により、 $S^{n-1}$  上の単位接ベクトル場が存在しないことを証明すればよい。新しい空間を定義しておく。

$$V_2(\mathbb{R}^n) = \{(x, y) \mid x, y \in S^{n-1}, \langle x, y \rangle = 0\}$$

もし  $S^{n-1}$  上に単位接ベクトル場が存在すれば、次の写像  $g$  が定義できる。

$$S^{n-1} \xrightarrow{g} V_2(\mathbb{R}^n) \xrightarrow{f} S^{n-1}$$

$$g(x) = (x, \mathfrak{X}(x)) \quad f(x, y) = x$$

写像  $f$  と  $g$  は連続で、各点  $x$  に対して、

$$(f \circ g)(x) = f(g(x)) = x$$

となる。

トポロジー  $\xrightarrow{\text{関手}}$  代数

$$\begin{array}{ccc}
 S^{n-1} & & H_{n-1}(S^{n-1}) \\
 \downarrow g & & \downarrow g_* \\
 V_2(\mathbb{R}^n) & \xrightarrow{H_{n-1}(-)} & H_{n-1}(V_2(\mathbb{R}^n)) \\
 \downarrow f & & \downarrow f_* \\
 S^{n-1} & & H_{n-1}(S^{n-1}) \\
 \uparrow \text{id} & & \uparrow \text{id}
 \end{array}$$

id : 恒等写像 :  $\text{id}(x) = x$ .

右辺を計算する :  $n$  が奇数のとき、

$$H_{n-1}(S^{n-1}) = \mathbb{R}$$

$$H_{n-1}(V_2(\mathbb{R}^n)) = 0.$$

矛盾なので、単位接ベクトル場が存在しない。

定義  $\rho(n)$  = 球  $S^{n-1}$  上で、互いに直交している単位接ベクトル場の最大個数.

例 円  $S^1$  上、単位接ベクトル場

$$\mathfrak{X}(x) = (-x_2, x_1)$$

が存在しているので、 $\rho(2) \geq 1$ .

定理 (Poincaré 1885)  $\rho(3) = 0$ .

定理 (Brouwer 1911)  $n$  が奇数  $\Rightarrow \rho(n) = 0$ .

例 (Hamilton 1843) 次は、球  $S^3$  上で、互いに直交している単位接ベクトル場である。

$$\mathfrak{X}_1(x) = (-x_2, x_1, -x_4, x_3)$$

$$\mathfrak{X}_2(x) = (x_3, -x_4, -x_1, x_2)$$

$$\mathfrak{X}_3(x) = (x_4, x_3, -x_2, -x_1)$$

よって、 $\rho(4) \geq 3$ .

定理 (Hurwitz-Radon 1923)

$$n = 2^{4a+b}c \quad (a \geq 0, 0 \leq b \leq 3, c \text{ 奇数}) \Rightarrow$$

$$\rho(n) \geq 8a + 2^b - 1.$$

証明 Hamilton による方法の一般化。例として、次は球  $S^7$  上互いに直交している単位接ベクトル場である。

$$\mathfrak{X}_1(x) = (-x_2, x_1, -x_4, x_3, x_6, -x_5, x_8, -x_7)$$

$$\mathfrak{X}_2(x) = (-x_6, x_5, -x_8, x_7, -x_2, x_1, -x_4, x_3)$$

$$\mathfrak{X}_3(x) = (-x_5, -x_6, x_7, x_8, x_1, x_2, -x_3, -x_4)$$

$$\mathfrak{X}_4(x) = (-x_7, -x_8, -x_5, -x_6, x_3, x_4, x_1, x_2)$$

$$\mathfrak{X}_5(x) = (-x_3, x_4, x_1, -x_2, -x_7, x_8, x_5, -x_6)$$

$$\mathfrak{X}_6(x) = (-x_4, -x_3, x_2, x_1, -x_8, -x_7, x_6, x_5)$$

$$\mathfrak{X}_7(x) = (-x_8, x_7, x_6, -x_5, x_4, -x_3, -x_2, x_1)$$

よって、 $\rho(8) \geq 7$ .

定理 (Adams 1962)

$$n = 2^{4a+b}c \quad (a \geq 0, 0 \leq b \leq 3, c \text{ 奇数}) \Rightarrow$$

$$\rho(n) \leq 8a + 2^b - 1.$$

証明 Poincaré-Brouwer による方法の一般化。

新しい関手

$$\{\text{空間}\} \xrightarrow{\text{K-理論}} \{\lambda\text{-環}\}$$

を作り、それを計算する。